

## 江戸の「江戸派歌人」の認識の一端

### 長瀬文豊『雁のはしら』をめぐる

中 澤 伸 弘

#### □ 要 旨

奥州白河の長瀬文豊が編んだ『雁のはしら』は、徳川時代中期以降の歌人の短冊をその筆跡の儘に模刻した短冊帖で、嘉永六年葉月、江戸の歌人井上文雄の序を以て刊行された。ここには一四〇人近い全国歌人の和歌短冊が収められてゐるが、この短冊帖から江戸を離れた奥州白河に、幕末期に歌壇が存在してゐたことや、その地方の一文人と江戸の歌人との結びつきが伺へるのである。また当時の江戸歌人の認識などを知る手掛かりになると思はれるのである。

#### □ キーワード

長瀬文豊 『雁のはしら』 奥州白河 加藤千浪  
江戸派歌人

—

奥州白河の長瀬文豊が編んだ『雁のはしら』（静嘉堂文庫蔵本）は、上端を青雲、下方に赤雲を刷った短冊形二葉を一丁に配し、そこに徳川時代中期以降の歌人の短冊和歌をその筆跡の

儘に模刻した文雅な短冊帖である。嘉永六年葉月、江戸の歌人井上文雄の別記のやうな序があり、刊記や書店名がないので、文豊の個人の刊行物であつたやうである。そこには編者の文豊の短冊も含まれてをり、全てで一三八人の短冊筆跡が収められてゐる。本書の編輯刊行については、文豊自身は何も述べてはゐないが、その経緯は井上文雄の序文から大方伺ふことができるので次に挙げておく。

(井上文雄序文)

古曾部の入道の秋風そよふくとよまれけむ 白川の関のわたりちかく 玉つしまの御神いはゝれ給へり かの里人長瀬文豊此道のすきものにて 世に名高き人々の言の葉はさら也 やごとなき御わたりのをさへ 広くよせて 此宮居にさゝげむとするに 同じく板に物して此わたり行かふ人々にも贈りて 昔しのぶるくさはひにもせまほし されどやごとなき御方々は其憚なきにあらねば そは御神にのみ奉りて 唯わがどちの言の葉をのみ かう桜木には匂はしつる也けり 古への跡を尊ぶる心ばへかの竹田の何がしがたぐひにこそ

嘉永六とせ 葉月十六夜

井上文雄

これによると、古曾部の入道（能因法師のこと）が『後拾遺集』に「都をばかすみとにもにたちしかど秋風ぞふく白河の関」と詠んだ白川の関の近くに玉津島神社が祀られてゐると言ふ。さてこの白河の里人である長瀬文豊は、和歌の道に興味があつて、世の中に著名な歌人の歌（短冊）や高貴な方々の（短冊）も多く蒐集して、この玉津島神社に奉納し、さらに此れを出版して、この白河の関の辺りを「行かふ人々に」も贈り、昔を偲ぶ種にしたいと考へたのである。だが、高貴な御方々の歌短冊をそのまま印刷して配布するのはよくないので、それは奉納の短冊帖にのみにして、吾々庶民の歌短冊だけを印刷して配るのだと言ふのである。

これで刊行の事情は理解できよう。文豊の気持ちは和歌短冊を通しての、地元白川の関の顕彰にあつたのである。ここにある玉津島明神とは、これは関の境明神のことで、現在も福島県側には玉津島神社、栃木県側には住吉神社が祀られてゐる。玉津島神社は延暦八年に紀州の和歌浦から勧請したと伝へる古社であるが、玉津島、住吉の両社とも和歌所縁の神であることは、白河の関が能因以来の歌枕の地として認識されてゐたことによるのであらう。

実際に奉納された短冊帖は今日伝来してゐないため、公家や大名であらう高貴な方々の名はわからない。一三八人の庶民については大方はわかるものの、その短冊の左側に居住地名と姓名が記される程度であり、その詳細が分からない人物がある。

この表記に従ひ居住地を多い順に挙げると、江戸九四人、陸奥白川一人、京五人、伊勢三人、下野宇都宮三人、伊豆二人、遠江二人、紀伊二人、大阪二人、尾張、三河、豊前、薩摩、肥前、武蔵忍、浦賀、姫路、会津、筑前、信濃、武蔵熊谷各一人となり、江戸が圧倒的に多く、ついで文豊の居住地、白河が多いことがわかる。ではどのやうな人物が掲載されてゐるのか、それを掲載の順に纏めたものが「表」である。ここには刊行された嘉永六年当時の生歿（生○、歿×、不明△）を記し、参考までにその歿年と師承関係をあげておいた。

このやうに一覧にすることによつて、この短冊帖の性格が伺へる。まづ最初に賀茂真淵、本居宣長を配することである。これによつてこの短冊帖は真淵以来の国学の学統を意識してゐると言ふことができる。丁度この弘化、嘉永のころには国学の学統についての認識が再確認される時期でもあつた。そして、宣長の後に加藤千蔭、村田春海を置くことは、真淵の学を嗣ぐ江

戸の国学者歌人を強く認識してゐることが伺へる。

嘗て全国的に名をなしてゐた本居の鈴屋派はこの時は内遠の時代であつた。それでもこの鈴屋の統の国学者歌人は多く居たはずであるが、ここでは、横井千秋、本居美濃、糟谷磯丸、足代弘訓、石川依平、竹村茂雄、大國隆正、加納語平、鈴木重胤、斎藤彦鷹、城戸千楯、久保長秋、伴信友の十三人を数へるに過ぎない。またこれらの人物が確実に鈴屋のみの学統と断定することも出来ないし、そのうち宣長に直に教へを受けたものは少数である。

また幕末から明治にかけて歌の主流とされた桂園派の歌人が五人、しかも当時の生存者は薩摩の八田知紀と江戸の三田花朝尼（三田葆光母）の二人といった偏りがある。更に国学とは関係がない堂上の歌壇に連なる人物、また京の歌人の系統を受ける者も五人でそれは堂上公家の門人であつたり、賀茂季鷹の教へに連なる人物であつて何れも故人である。

鈴屋派や桂園派といった当時の全国歌壇の趨勢を考へてみると、この短冊帖にはそれへの配慮はなく、それに反して江戸との縁のあるものが九十四人（故人三十八人、当時生存してゐたと確認出来る者三十六人、生歿不明二十人）も占め、その中に春海、千蔭の兩人から教へを受けた、またその教へ子、即ち孫弟子と言ふことのできる所謂「江戸派」の歌人が四十三人（故

人二十二人、当時生存してゐたと確認できる者十八人、生死不明三人も存在し、また江戸に住んではゐなくとも、彼等の教へを受けた、地方歌人で所謂江戸派と呼ばれる人物が八名（故人三人、当時生存してゐたと確認出来る者五人）を数へることがのできるのである。即ち、明確に江戸派と呼ばれる歌人が五十一名数へられ、この数はこの短冊帖にある歌人の半分に近い数である。また実際に春海、千蔭の教へは受けなかつたとしても、江戸に在住してゐればそれらの人物と交流したわけであり、少くともその影響は何かしらの形で受けてゐたことと思はれ、江戸といふ町の中で完全に独立してゐたとは言へまい。和学講談所の塙の門に出て、江戸派の人物との交流はあつたであらうし、影響も多分に受けてゐた筈である。清原雄風などもその師承には春海も千蔭もなく、江戸派の統ではないもののかなり近しい関係にあつたはずである。

江戸派と断じることが難しいものであつて、『大江戸倭歌集』や『摘英集』に歌が所載されてゐる者については、参考のために「表」にその旨を記しておいた。それは江戸派の学統を受けてゐたといふ確実な証拠がないために検証が難しいものの、『大江戸倭歌集』に歌が載ることは（堂上派の場合もあるのので一概には扱へないとしても）江戸派の人物と何らかの關係があつたことも考へられる。『摘英集』は江戸派の流れの、当時

の重鎮、井上文雄の編であることも見逃せない。

幕末期に江戸派と言ふ認識で歌人を括るのはやや問題があると思はれるが、斯様にこの短冊帖には、江戸と言ふ町を中心として、そこに活動した（する）人物の歌短冊を集めたと考へてみても、世に言ふ、真淵以来の所謂「江戸派」、または江戸を活動の地盤とする歌人の短冊が多くを占めてゐる特徴があると言へるのである。

### 三

本短冊帖の編纂の概要は先にも記した井上文雄の序文の語ることしかわからないのであるが、逆に文雄が序文を書いたと言ふこと、改めて言へば井上文雄の序文があることから、本書の性格がわかるものである。嘉永六年に文雄は五十四歳、春海門の岸本由豆流の教へを受けた、江戸における歌人としての名は高いものがあつた。この年文雄は江戸の知己である加藤千浪、草野御牧、横山由清、伊能穎則らの校合により『冠註大和物語』を刊行（この年自序）してゐる。この嘉永から安政期にかけての、文雄の江戸のみならず、地方からの歌人との交流を見れば、判明したものでもかなり広範囲であり、各地に文雄の名が弘まつてゐたことが理解できる。その例をあげれば、まづこの年に

は上州室田の関橋守の五十賀歌集『賀五十齡歌』に跋文を書き、翌嘉永七（安政元）年には尾張の市岡和雄（宣長門の市岡孟彦

の男）の江戸行に際して、和雄は江戸滞在中に文雄の所を尋ね、

歌会に加はつてゐる。安政二年秋の三河の村上忠順の江戸行に  
当たつても、忠順はその九月七日に文雄の所を問うてゐる。ま

たその翌年には忠順の依頼で百番歌合はせの判者を務めて判詞  
を書いてゐる。安政三年には上州の薫屋安貞の八十賀歌集に序  
文を寄せるなど、文雄と地方歌人との交流や繋がりが伺へる。

歌人や、歌字びに興味あるものが江戸に出る時は文雄のもとを  
問ふ事が当然のこととされてゐたことがわからう。文雄の名声

の高さの蔭には、彼の歌人としての力量とともに、所謂江戸派  
の血脈を嗣いだ人物としての高い評価が存してゐたことと思は  
れるのである。そして文雄と交流することは当然のことながら

当時の文雄を取り囲む江戸の歌人とも繋がる事を意味したので  
ある。先に述べた『冠註大和物語』の校合者四人、すなはち加  
藤千浪、草野御牧、横山由清、伊能穎則の短冊が（由清は本人

のものではなく、母桂子が収められてゐるが）本書に見えるの  
もこの関係であり、かやうに本短冊帖の江戸歌人は井上文雄関  
係を挙げただけでもかなりの数となるやうに、蒐集にあたり、

所謂「江戸派」と呼ばれ、またその血脈に連なる歌人が多く占  
められるのもその当然の成り行きであつた。

#### 四

ところで長瀬文豊をめぐる、当時の白河ではどのやうな歌壇  
活動があつたのであらうか。白河には江戸中期に松平定信が封  
ぜられ、その古学奨励もあつたやうで、その教へを奉じた熊田  
敬信（呂月、蘆月とも）が出て歌字びを弘めた。文豊はこの門  
から出たのである。そのゆかりから敬信の短冊は本書にも収め  
られてゐる。

敬信は明治二年に八十六歳で逝いたが、二十歳のころから歌  
の道に志し、その後江戸の歌人加藤千浪の指導を受けたのであ  
つた。千浪の方が二十六歳若かつたが歌には秀でてゐたのであ  
らう。その証に現在熊田家文書中に天保十五年八月の『三十番  
歌合』が伝存してをり、この判者は加藤千浪が務め、判詞を書  
いてゐる。当時千浪は三十五歳の若さであつたが、その当時から  
千浪との交流があつたことがわかるとともに、歌合はせがで  
きるやうな歌壇の状況であつたことがわかる。江戸の千浪との  
積極的な文通により、その指導に基づき、和歌の添削なども行  
はれたことであらう。熊田家文書中には慶應二年の『月次兼  
題和歌』も伝存し、そこには三十人の歌人の名が著録されてゐ  
る。その中には本書に短冊を収める敬信（呂月）、長瀬文豊、

大塚成蹊、高林信之、今井衛史、長瀬木綿子の名が見える。文豊の妻、木綿子はこの敬信の女であった。文豊は斎藤辨蔵の男で、後に長瀬氏を嗣ぎ、敬信や加藤千浪に学んだ。菩提寺である白河の関川寺には文豊、木綿子の歌碑が建てられてゐるなど歌人として名があつたことを今に伝えてゐる。本短冊帖にも短冊を収める今井衛史は天神町の商人で、はじめは俳諧に志し、後に敬信について和歌の道に入ったのであつた。

以上『白川市史』の語る断片的なことからも、当時白川には熊田敬信が率ゐる歌壇があり、江戸の千浪の指導のもと、かなり積極的な活動をしてゐたことが伺へるのであるが、資料の未調査によつてその全貌が見えないことが残念ではある。

## 五

当時の白川の歌壇の状況が断片的に理解出来たが、それでは遠く離れた江戸の歌人との交流の懸け橋の役目、また江戸派歌人との関係を持つに至つた契機は何であつたのであらうか。そこに江戸歌人の加藤千浪の存在がある。千浪はその名からも分かるやうに加藤(橘)千蔭を思慕する心が厚かつた歌人である。

千浪が白川の人であつたことはその歿後に本居豊穎の書いた「加藤千浪碑」(東京牛島神社境内、また豊穎『あきのや集』所

収)に「加藤千浪ぬしはもとみちのくなる白河の人なり」とあることからわかる。幼いころから書を読み、歌を詠む事を好んだ。江戸では岸本由豆流について学んだ。(『学苑』第十卷八号 文学遺蹟巡礼「加藤千浪」参照)由豆流は村田春海の門に出た人物なので江戸派の血脈を受けてゐる。これで千浪は春海の孫弟子の關係に当たるのである。この由豆流の門からは井上文雄も出てゐるので同門でもあつた。

白川における千浪について『白川市史』はその出自を「名は弥三郎または弥助という。文政六年(一八一三)阿部家の白川転封に従つて忍(埼玉県行田市)から白河に移住した御用商人で、天神町に住み足袋屋を営んだ加藤家の一族である。江戸に出て国文学および和歌を岸本由豆流に学び江戸で活躍した歌人。白河では熊田呂月をはじめ多くの人々に歌道を教え、和歌の添削、歌合わせの判者などを行なう」と記してある。加藤家についての記述はこれで正しいとしても、千浪の出自をめぐる伝とはなつてゐないのでやや補記が必要である。千浪には「萩園詠草」(加藤千浪歌文集、昭和一五年刊)といふ家集があるが、この元になつた『萩園文詞』『萩園文集』『萩園集』といった写本が私の手許にある。刊本の『萩園詠草』(加藤千浪歌文集)はこの抜き書きである。この架蔵の『萩園文詞』の中に「父君の墓碑銘」と題する文があり、これは刊本にはないものであり、

江戸の「江戸派歌人」の認識の一端 長瀬文豊『雁のはしら』をめぐる(中澤)

千浪の生家のことが記されてゐるので以下に概要を記しておく。千浪の父の名は美方、姓は平澤、清次郎といひ出羽米澤の人で、二十歳余りの時に白河の加藤五左衛門の養子となり、自らも五左衛門と称した。弘化四年四月三日に六十九歳で歿した。これによると千浪は父三十三歳の子となる。千浪は若くして江戸の呉服屋に奉公に出た。父は五十余歳の時に白川から江戸の千浪の元へ来たと言ふ。子供は五人ゐて、長女、長男（弥吉、秋定と言ふ）、次男が千浪であとは早逝した。父の一周忌に故郷白河に改葬し、その時には供養のために白楽天の詩を題に「人々に文や歌やと書きてと乞う」と言ふ。

かやうに千浪の父は加藤家に養子に入つたのであり、その加藤家から出た千浪であつた。千浪の父は熊田敬信の三歳上であり、この二人の交流も考へられよう。若くして江戸に出て、由豆流に認められた千浪の、二十歳代は丁度天保の頃である。このころは国学の影響もあつて、和歌を詠む事に志す人々が全国的に増加した時代であつて、奥州白河の地もまた同様であつた。その時に丁度この地から出た千浪が江戸歌壇との交流の懸け橋になつたのである。江戸で歌人としての名声が上がらうとも、また若くして早くに故郷白川を出たとしても、千浪は自分の故郷であり、且つまた父親の第二の故地でもある白川を忘れることはなかつたであらう。そして江戸へ出た父を介して、その歿

後もまた繋がり深い人間関係の故郷の人がゐたことであらう。千浪の目は白川にも注がれてゐたのであり、ややもすれば経済的な支援をした者もゐたのではないか。地方出身者で中央で成功した者の蔭には好くも悪くも「故郷」と言ふものが重くのしかかるものであり、この視点は重要であらう。

かやうに歌人の短冊を蒐集して、其れを刊行すると言ふ、文雅の営みが江戸を離れた白川の地で行はれたのも千浪の指導に与つてのことであつた。そこには経済的な裕福さも必要となる。また井上文雄が序文を書いたのも加藤千浪を介してのことであらうし、本短冊帖の内容が多分に江戸派と呼ばれる歌人に偏したのも千浪と言ふ江戸歌人を介しての短冊蒐集であつた為と思量されるのである。長瀬文豊編の『雁のはしら』は表面には千浪との関係を見出すものはないが、内面には白川出身の千浪の影響や尽力が濃く伺へるものと言へるであつて、それゆゑに、そこには賀茂真淵以来の所謂江戸派一統の認識の一端が伺へるのである。

## 六

江戸と奥州白河とはかなりの距離がある。しかし歌壇として、歌人の交流には近いものがあつた。この両歌壇の懸け橋を

した人物が白河所縁の加藤千浪であった。本短冊帖『雁のはしら』はこのやうな人物との関係の許に成り立つたもので、おのづから当時の江戸の師承関係の近い歌人の短冊が多く載ることは自然の勢ひであつた。またそのことが、当時の江戸における単なる歌人の短冊を多く集めたと言ふより、意識的に真淵以来の江戸派を集める結果ともなり、そのことが所謂「江戸派」というた認識の表はれた一つの形となつて、其れを今に伝へることになつたのである。

なほこの短冊帖『雁のはしら』については、福井久蔵の『大日本歌書綜覧』にも記載を欠く。また『名家伝記資料集成』に『雁のはしら』所載の人物の項目に、筆跡として『長柄のはしら』とあるのは本書のことと思はれるが、この改題本であらうか、その名では『國書總目録』にも記載を欠き、不審である。本稿のなるについて蔵書の閲覧を許可された静嘉堂文庫に厚く御礼申し上げます。

#### 注

(1) 賀茂真淵の歌短冊は春の歌で「すがのねの長き春日に袖ひちてみむとおもひし花はちりけり」である。また最後の文豊は秋と題する秋の歌で「きのふけふゆふべを秋と

江戸の「江戸派歌人」の認識の一端 長瀬文豊『雁のはしら』をめぐる(中澤)

思ふまにひるもさびしき秋のおとかな」である。歌の配列には四季などの規則性はない。

(2) 『古学道統図』など、国学の師承関係の系譜が書かれるのもこのころである。拙編『国学和学研究資料集成』巻一、『古学道統図』解題拙稿参照。

(3) 拙稿「市岡和雄をめぐる人々」東洋文化一〇三号

(4) 村上忠順『草分衣日記』「村上忠順集」第二に所収。

(5) 嘉永、安政期以降に井上文雄が江戸における歌の重鎮と見なされてゐたがそれは何も和歌に限られたことに限定されてゐない。この少しあとの安政六年三月に武州忍において裕貫齋月一民、蓬貫齋月一勢、貞農齋月一鷹が会主となり立花の会(諸流挿花茶之湯盆景会)が行はれた。このときの目録「こなむしろ」に文雄は序文を寄せてゐる。一地方の会の片々たる目録の為に、文雄に序文を依頼し、また文雄が一文をよせるのは(原稿謝礼を考へたとしても)それなりの関係があつたことが言へよう。なほ鈴木亮「井上文雄年譜稿」成蹊國文三十九号にこの時期の活動が纏められてゐる。

(6) 『白河市史』三卷、第一編文化、一六四頁に敬信を「町人文化としての和歌が普及したのは定信の影響によるところが大きい、その指導的役割を果たしたのは呂月で



ある。」と見え、白河歌壇には彼の存在が無視出来ないことがわかる。なほ同市史はこの頁以降に白河歌壇の主な人物をあげ、そこには加藤千浪、敬信、今井衛史や文豊の伝記が書かれてゐる。

(7)

以下のことは先述の市史による。但し熊田家文書は市としても未調査であり、市史に載る写真等の資料は、その項目の執筆者が個人として撮影したものである由。(白河市歴史民俗資料館学芸委員の回答)。熊田家における和歌文学の資料の調査研究が俟たれるものである。敬信には『木屑春廼舎家集』『敬信家集』『種廼埜』『呂月家集』『名所百首』『竹根集』などがあるが、『国書総目録』には記載がない。なほ『三十番歌合』の参加者は小林介信、折橋棟隆、乗附容、室井良光、川崎道敬、立花枝茂、大塚高英、菊地春俊、高林信之、西歩などであり、本書に短冊を収められてゐるものは大塚高英、高林信之の二名である。

「表」(『雁のはしら』所載短冊(掲載順)氏名)

凡例

①嘉永六年の当時の生歿について、×は故人 ○は生存 △は不明 記載の年号は歿年(『和学者総覧』『名家伝記資料集成』などによる) 『現』は歿年が不明であるが、鋤柄助之編

『現存百人一首』(安政七年加藤千浪序)に記載があり、嘉永六年当時の生存が確認できる者 「熊田家文書ニヨル」は歿年が不明であるが熊田家蔵『慶應二年兼題和歌』に記載があり、嘉永六年当時の生存が確認できる者

②地名は『雁のはしら』に記されてゐるもの

③師承関係は『和学者総覧』『名家伝記資料集成』などによる複数の師承関係があるものは江戸派との繋がりのみ取り上げた。師承関係の不明、または明確ではない者については、参考までに江戸派との関連のあつて歌が採録されてゐる歌集を挙げた。

④地方の歴史書等を当たればその詳細が分かる者もあると思はれ、不完全であるが、今後のご教示を俟ちたい。

賀茂真淵	×							安田躬弦	×	江戸	文化一三年	賀茂季鷹門
本居宣長	×							一柳千固	×	江戸	天保三年	江戸派(千蔭雄風門)
加藤千蔭	×	江戸	文化五年					木村定良	×	江戸	弘化三年	江戸派(千蔭門)
村田春海	×	江戸	文化八年					本間遊清	×	江戸	嘉永三年	江戸派(春海門)
清水濱臣	×	江戸	文政七年	江戸派(春海門)				石原正明	×	江戸	文政四年	塙門
高田與清	×	江戸	弘化二年	江戸派(春海門)				片岡寛光	×	江戸	天保九年	江戸派(春海雄風門)
横井千秋	×	尾張	享和元年	鈴屋派				原久胤	×	江戸	天保一五年	江戸派(雄風門)
三島自寛	×	江戸	文化九年	江戸派(真淵門)				鈴木安寛	△	江戸	不明	大江戶倭歌集所載
賀茂季鷹	×	京	天保一二年					畠山梅軒	×	江戸	天保一二年	江戸派(由豆流門)
村田多勢子	×	江戸	弘化四年	江戸派(春海門)				植村正路	×	江戸	文化一四年	江戸派(千蔭門)
北村李文	×	江戸	嘉永三年					海野遊翁	×	江戸	嘉永元年	前場黙軒門
塙保己一	×	江戸	文政四年					小林元雄	○	江戸	文久二年	江戸派(春海門)
成島司直	○	江戸	文久二年					岡田真澄	×	江戸	天保九年	江戸派(千蔭門)
屋代弘賢	×	江戸	天保一二年	塙門				高井宣風	×	江戸	天保三年	日野資枝萩原宗固門
広岡田豆子	△	江戸	不明	江戸派力(千蔭門)				正木千幹	×	江戸	文政六年	江戸派(千蔭門)
岸本由豆流	×	江戸	弘化三年	江戸派(春海門)				山本正臣	×	江戸	文政六年	大炊御門家人
清原雄風	×	江戸	文化七年					菊地袖子	×	伊豆	天保九年	江戸派(千蔭門)
北慎言	×	江戸	嘉永元年					糟谷磯丸	×	三河	嘉永元年	鈴屋門
小川伴鹿	×	江戸	文政一二年	江戸派(千蔭門)				妙泉寺亜元	×	江戸	天保一三年	桂園派
本居美濃	×	伊勢	天保九年	鈴屋派 小津姓				高井八穂	△	江戸	不明	高井宣風男
聴雨庵連阿	×	江戸	天保六年	江戸派(浜臣門) 革島姓				秋山光彪	×	豊前	天保三年	江戸派(春海門)
村田了阿	×	江戸	天保一四年	江戸派(雄風門)				荒木田久守	×	伊勢	嘉永六年	久老(真淵門) 男

江戸の「江戸派歌人」の認識の一端 長瀬文豊『雁のはしら』をめぐって(中澤)

足代弘訓	○	伊勢	安政三年	鈴屋派	黒澤翁滿	○	武藏忍	安政六年
松田直兄	○	京	嘉永七年	賀茂季鷹門	岡部春平	○	江戸	安政三年
香川景樹	×	京	天保一四年	桂園派	伊場(庭)時言	△	江戸	不明
石川依平	○	遠江	安政六年	鈴屋派	清水謙光	○	江戸	不明
八田知紀	○	薩摩	明治六年	桂園派	伊庭秀形	○	江戸	不明
中島広足	○	肥前	文久四年	江戸派(千固門)	朝田由豆伎	×	江戸	嘉永四年
竹村茂雄	×	伊豆	弘化元年	江戸派(春海門)また鈴屋派	山田常典	○	江戸	文久三年
大國隆正	○	京	明治四年	鈴屋派	仲田顯忠	○	江戸	安政七年
加納諸平	○	紀伊	安政四年	鈴屋派	吉田敏成	○	江戸	文久四年
鈴木重胤	○	江戸	文久三年	鈴屋派	村田春野	○	江戸	明治四年
前田夏蔭	○	江戸	元治元年	江戸派(浜臣門)	萩原広道	○	大坂	文久四年
橋守部	×	江戸	嘉永二年		横山桂子	○	江戸	安政二年
井上文雄	○	江戸	明治四年	江戸派(千蔭、由豆流、千固門)	市川真風	×	江戸	弘化四年
加藤千浪	○	江戸	明治一〇年	江戸派(由豆流門)	伊能頼則	○	江戸	明治一〇年
斎藤彦磨	○	江戸	嘉永七年	鈴屋派	堀内政雄	△	江戸	不明
田内親輔	△	江戸	不明	桑名藩士	竹中玄洲	△	江戸	不明
服部斐雄	△	江戸	不明	富樫広蔭門	天野政徳	○	江戸	文久元年
垣本雪臣	×	大坂	天保一〇年	賀茂季鷹門	瀬戸久敬	○	江戸	不明
多田千枝子	×	江戸	天保五年	江戸派(千蔭門)	間宮永好	○	江戸	不明
城戸千桶	×	京	弘化二年	鈴屋派				
清水光房	○	江戸	慶應元年	江戸派(浜臣門)				
芦廼屋麻績一	○	江戸	安政二年	江戸派(由豆流門)				

遠山長嶺	△	江戸	江戸派 (浜臣門)
塙 忠宝	○	江戸	文久二年 塙門
黒川春村	○	江戸	慶應二年
菊地民子	○	江戸	元治元年 江戸派 (敏成門)
久保長秋	△	遠江	不明 鈴屋派
寺山吾輩	○	江戸	明治二年 江戸派 (小林元雄門)
須藤千檀	△	白川	不明
小林百枝	△	江戸	不明 江戸派 (由豆流門)
倉田道賢	△	浦賀	不明
武谷栄国	○	江戸	明治一八年 大江戸倭歌集 摘英集所載
武谷雪子	○	江戸	明治五年 栄国妻
川合良熙(臣)	○	姫路	文久二年
高本康哉	○	江戸	大江戸倭歌集所載 『現』
井田千英	△	江戸	
戸田光利	△	宇都宮	不明
慈光寺海禪	△	宇都宮	不明
积 霊海	△	宇都宮	不明
熊田敬信	○	白川	明治二年『白川市史』ニヨル
伊藤孝庸	△	白川	不明
中野直中	△	白川	不明
野村直臣	△	会津	不明
神足寺慈舟	△	江戸	不明
風間年繁	×	江戸	天保一一年 万葉略解通標の著有リ、千蔭門カ
細井信子	○	江戸	不明 大江戸倭歌集 摘英集、千船集所載 『現』
橋本智子	△	江戸	不明
三島景衡	○	江戸	不明 大江戸倭歌集 摘英集所載 『現』
三田花朝尼	○	江戸	明治二年 桂園派
草野御牧	○	江戸	明治元年 江戸派 (文雄門)
永持重則	△	江戸	不明 大江戸倭歌集所載
大塚高英	△	江戸	不明
大塚成蹊	○	白川	不明 熊田家文書ニヨル
長瀬木綿子	○	白川	不明 長瀬文豊の妻(熊田敬信の女) 熊田家文書ニヨル
笠倉延平	○	江戸	不明 大江戸倭歌集所載 『現』
武谷機子	○	江戸	明治六年 武谷栄国母
福田元長	○	江戸	不明 大江戸倭歌集所載 『現』
福田松子	△	江戸	不明
間宮八十子	○	江戸	明治二年 江戸派 (永好妻)
高木義標	○	江戸	慶應二年
多津子	△	江戸	不明
信子	△	江戸	不明
和田時風	△	江戸	不明

江戸の「江戸派歌人」の認識の一端 長瀬文豊『雁のはしら』をめぐって(中澤)

今井衛史	○	白川	不明	熊田家文書ニヨル
高林信之	○	白川	不明	熊田家文書ニヨル
青木直中	△	白川	不明	
佐藤潔英	△	白川	不明	
高野山門主宝性院	△	不明	紀州	湛然
岩下貞融	○	信濃	慶應三年	江戸派(浜臣門)
奥野安興	○	熊谷	明治一〇年	黒澤翁満門
岡部秋子	△	江戸	不明	岡部春平妻
伴 信友	×	江戸	弘化三年	鈴屋派
稲村三羽	×	江戸	弘化三年	桂園派
西田直養	○	筑前	元治元年	江戸派(秋山光彪門)
長瀬文豊	○	白川	明治一三年	江戸派(加藤千浪門)
				光彪ハ春海門

(なかざは のぶひろ・

東京都立小岩高等学校教諭 博士(神道学)